

おはようございます

JA信州うだ 西部地区農機センター係
伴 隆之介

上田市の西部地域は水稲と畑地が広がりがさまざまな農産物が生産されています。そのため、大型・小型問わず多様な農機具の修理依頼があります。入所1年が過ぎましたが、修理した農機具をお客さまにお戻りする時の喜びの笑顔やお礼の言葉にやりがいを感じています。生産者の皆さまにとって農業機械はとても大切な相棒。状態を詳しく聞き、なるべく良い状態でお返ししています。シーズン前後の全体整備をぜひ!

健康 Q & A

新型コロナウイルスは収まった?

Q 父が新型コロナウイルスで入院となりました。最近はまだ報道されなくなったので、もう新型コロナウイルス感染症は収まったと思っていたのですが、実際はどうなのでしょう?

(52歳、女性)

A 確かに2022年11月前後の第8波以降は、それほど大規模な流行は起きていませんが、完全に終息したわけではなく、23年8月と24年1月にも第8波の半分程度の流行は起きており、当院でも現在10~20人程度の患者さんが入院しています。まだまだ油断のできない状態と考えられます。

それ以上に気になるのが、肺炎を起こす患者さんが増えてきたことです。お父さまがコロナ肺炎になったとのことですが、デルタ株のコロナウイルスが21年12月ごろにオミクロン株へ移行してから、コロナ肺炎はほとんど見られなくなりました。ところが、今年はコロナ肺炎を起こす方が増えているのです。

幸いなことに、当院では人工呼吸器が必要となるような重症の方はいませんが、県内の他の病院では人工呼吸器を使っている患者さんが報告されています。この原因としては、今年になってから流行しているオミクロン株のJN.1という系統がこれまでよりも重症化しやすくなっている可能性や、コロナワクチンの接種率が3回目以降、大きく下がっていることが影響している可能性があります。

22年秋以降にワクチンを接種していない方は、JN.1系統のウイルスに対して免疫がない状態ですので、特に気を付ける必要があると思います。

(JA長野厚生連長野松代総合病院内科

(感染症)部長 田中俊憲)

お知らせボード

★凍霜害に注意 県など呼び掛け

暖冬傾向が続く近年。果樹を中心に23億円余の被害を受けた昨年同様の危険性が今年も指摘されています。県農政部はメールマガジン「チェック! ながの県農業サポートメール」で注意を呼び掛ける一方、対策動画やパンフレット(下のQRコード参照)を公開。昨年、被害が大きかった4地域(松本、佐久、長野、北信)で3月末から啓発キャラバンを巡回させています。



対策動画



パンフレット

メルマガ登録は
こちらから▶SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS持続可能な地域社会へ
JAは取り組んでいます

地域課題に向き合う長野県JAバンク

農と暮らしの基盤を強固に

防災拠点の機能強化

太陽光発電とEV導入

非常時には電力供給も

元日の能登半島地震発生から3カ月。電気、ガス、水道といったライフラインが絶たれ、道路網の寸断でアクセスもままならなくなっている被災地の状況をニュースで見つて、災害への具体的な備えについて思いを巡らせる人も多いでしょう。地域住民が集う場であるJA施設に太陽光発電設備、蓄電池にもなる電気自動車(EV)を導入し、非常時でも電力供給ができる防災拠点へとパワーアップを果

JA松本ハイランド・JA洗馬



非常時の電力供給機能も視野に入れ設置した太陽光発電パネル(上)JA松本ハイランド本所 下)JA洗馬本所資材倉庫



たしたのがJA松本ハイランドとJA洗馬です。JA松本ハイランドは松本市南松本の本所、東館と西館の屋根に合わせた144帖の太陽光発電パネルを設置し、60帖時の容量を持つEV2台を導入しました。太陽光の発電量は当然ながら天候によりますが、条件がそろえば普段の41%の電力が賄える計算です。3月から稼働を始めました。同JA本所は既に「災害時

対応も」(マシ)としています。

サポート事業所」として松本市の避難所に指定されており、装置の導入で停電時には電気も供給できるようにになりました。災害時は西館2階にある200人収容のホールを開放する予定です。

一方、JA洗馬は本所資材倉庫と、隣接する介護事業所「クレアせば」の屋根に太陽光発電パネル(出力は前者が27・5帖、後者が26・5帖)を設置、同時に導入した20帖時の容量を持つEV(1台、本所)と非常用発電機(出力5帖、クレアせば)も導入し、併せて災害、停電時の非常用電源供給態勢を整えました。

地域資源の有効活用

もみ殻使い臭気対策

JA大北 燻炭化装置を導入



松川村のJA大北カントリーエレベーター敷地内に設置した燻炭化施設(手前)



もみ殻から製造する燻炭

米づくりの過程で必然的に生まれるもみ殻。昔は稲刈り後に野焼きし、田んぼにすき込む風景が見られたものですが、近年は煙や臭いに苦情が寄せられることもあり、農家はその処理方法に頭を悩ませています。また、白馬村のアルプス農場では「はくばの豚」が丹精込めて育てられていますが、農場の堆肥舎などから発生する臭気対策が課題となっています。JA大北は3月、もみ殻を野焼きせず処理できるよう、「燻炭化装置」を導入しました。この装置で炭になったもみ殻は、土づくりのため田畑にすき込んだり、「はくばの豚」農場から作り出される堆肥の脱臭材として活用され、管内における野焼きの減少や農場周辺の臭気改善が期待されています。

同JAの長澤忠義常務理事は「この取り組みによって、もみ殻を有効に活用し、これからの循環型農業への第一歩となるよう期待しています」と語っています。

堆肥ペレットが好評

JA佐久浅間 循環型農業へ前進



堆肥を作る「土づくりセンター」内に導入したペレット製造装置

JA佐久浅間が運営する「望月土づくりセンター」は、佐久市望月地区の酪農家で課題となっていた牛のふん尿処理を兼ねて堆肥製造を始めたのが出発点。堆肥は、土

づくりに有効ですが、バラバラの状態の堆肥を広い農場に散布するためには専用の機械が必要となるなど、利用上の課題となっていました。より手軽に使えるように同

JAは粒状のペレットに加工、「もちつき有機」の名称で販売を開始しました。少量パックでも販売しているため、農家だけでなく家庭菜園を営む方々からも「使いやすい」と好評です。まきやすくなったことで利用者の裾野が広がり、「もちつき有機」堆肥を起点として水稲や野菜農家と畜産農家との連携が進み、循環型農業の実現に向け一歩前進しました。循環型農業は持続可能な未来に向けて必要な取り組みです。同JAは「望月土づくりセンター」の見学、開放などを通じて、地元の小学生らに伝えています。

「もちつき有機」に関するお問い合わせは、同JA営農経済部生産資材課(☎0267・23・6702)へ。

食と農で地域に笑顔をつくります
次代につなげる農業・組織・経営基盤の確立

JA長野県

JA長野中央会 営農農政部

〒380-0826 長野市北石堂町1177-3
TEL.026-236-2030 FAX.026-236-2008いいJAん! 信州
https://www.ijan.or.jp/長野県のおいしい食べ方
公式X(旧Twitter)